

A large crowd of people is gathered for the Tokyo 2020 Olympic torch relay ceremony. In the background, the Olympic cauldron is lit, and several national flags are flying. The sky is blue with white smoke trails from the torches. In the foreground, a large crowd of people is cheering, and a shower of golden confetti is falling from above. The overall atmosphere is festive and celebratory.

TOKYO 64-20

INNOVATION

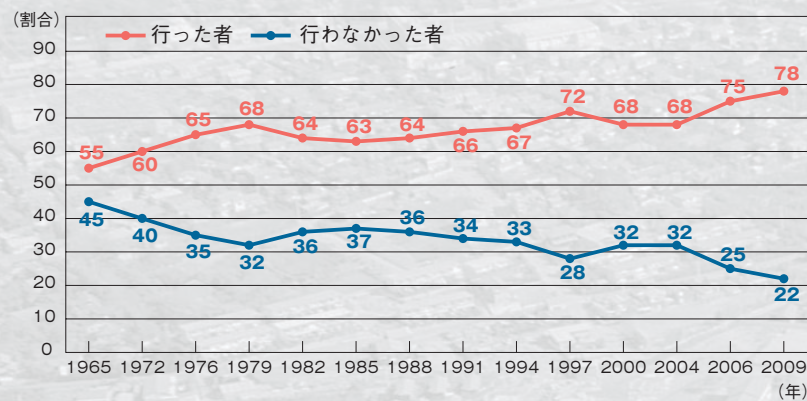
オリンピックで 時代が変わる

オリンピックがもたらす夢と繁栄。わが国の成長の航跡をたどる

東京に再びスポーツの祭典が帰ってくる。
昨年9月、2020年のオリンピック・パラリンピック開催都市の座を射止めた東京。
明け方にブエノスアイレスから中継された決定の瞬間は、この時代を生きる日本人の記憶に深く刻まれた。
その瞬間から東京は、日本は、6年後の“夢”を描き始めている。
そして、半世紀前の「東京オリンピック」に想いを馳せる。
「平和の祭典」という宣言を体現したこの地球規模のイベントが、
私たち日本人に与えた勇気と感動の大きさは計り知れない。
小誌では3回にわたって、オリンピックを起点とした過去から未来への日本の航跡をたどっていく。
この祭典がもたらす成長と繁栄、そして夢と希望に触れてみよう。

日本のスポーツ競技人口の推移

●年間における運動・スポーツの実施状況の推移(1965-2009年)



出典：内閣府「体力・スポーツに関する世論調査」

1965 (昭和40) 年から1979 (昭和54) 年までの間に飛躍的な伸びを示し、その後今日まで一定の割合 (65 ~ 70%) で推移している。このように我が国のスポーツ状況は、1980年代前後を境にしてこれまでの量的増大から質的充実に向けて確実に変化しており、その変化に応じたスポーツの振興からプロモーションへの切り替えを求めている。

感動を生んだ
競技場感動の舞台からさぐる
東京大改造の今昔

オリンピックの開催は、その都市の様相を激変させる。ビッグイベントの開催に向け、国家と都市の威信をかけた都市の変革が始まるのだ。道路や鉄道といった交通網のインフラ整備、宿泊や滞在に関わるハードとソフトの充実など、そして何よりもドラマのステージとなるスタジアム。オリンピックがもたらすイノベーション、初回は「競技場」にフォーカスする。戦後復興期を経て飛躍の時代に

あった日本が、いかにして世界に誇る感動の檜舞台を作り上げたのか。大都市にあって、広大な競技施設を建設する過程には紆余曲折があった。さらにその遺産ともいえる施設群は、スポーツ振興や文化を牽引する拠点として閉会後にも大きな役割を果たしている。そして六年後、成長を遂げた都市「東京」ならではの都市計画と各ステージの構築と東京大改造ともいえる歴史的なプロジェクトにあって競技場や施設に託された使命をさぐる。

駒沢公園オリンピック総合運動場は1940年に開催予定だった「幻のオリンピック」のメイン会場と予定されていた。四半世紀後の東京オリンピックでバレーボールなどの競技会場として再び咲く。現在、この遺産はその記憶を留めながら、都民のスポーツ拠点として親しまれている。

1964 TOKYO MAP

三〇を超える施設整備が
技術と経済の成長を促進

一九六四年の東京オリンピックで使用された競技施設は三〇を超える。新設が一七カ所、仮設が五カ所、そして国立競技場をはじめ改修、拡充された競技施設が八カ

所だ。これら競技施設は東京以外にも千葉、埼玉、神奈川、長野各県にも整備されたが、メインとして計画されたのは神宮外苑、代々木公園、駒沢公園だ。各エリアには現在でも数多くの施設が現役の競技場、ランドマークとして残る。

建設された「神宮外苑」の国立競技場が、大規模な改修を経て東京オリンピックを象徴するメインスタジアムとなった。戦前には陸軍練兵場、戦後は米軍に接収されていた「代々木」にも白羽の矢が立つ。開催決定後に接収が解除され、着工からわずか一八カ月という驚

異的な短期施工で威容を誇る国立代々木競技場が建設された。「駒沢公園」では、遡ること約三〇年前に開催辞退を余儀なくされた幻の東京オリンピックの計画をベースに準備が進められた。この駒沢と外苑を結ぶ青山通りの整備もまた重要なファクターとなった。



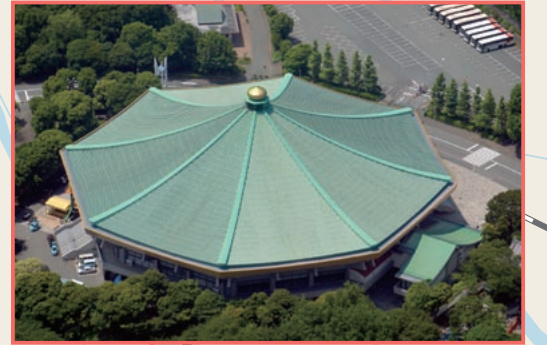
国立競技場



国立代々木競技場



駒沢オリンピック公園総合運動場



日本武道館



東京国際空港
(羽田空港)

競技場及び関連施設

● 新設
● 仮設

0 5km

もはや戦後ではない
経済成長を促すオリンピック

2020 TOKYO MAP

目の行き届く コンパクトなゾーニング

一九六四年の東京オリンピックでは熱戦のステージが一都四県に分散するかたちとなったが、六年後の大会ではこれまでに例のないコンパクトな大会を目指す。前回

の東京オリンピックで使用された施設を活用しながら、主な競技場を晴海の選手村から半径八キロメートルの範囲に集中させる構想もある。全三七施設のうち新設は一二施設、一二施設は恒久施設として残される計画だ。メインとなるオリンピックスタジアムは現在の国立競技

場を解体した跡地に新設され、その他、国立代々木競技場、東京体育館、日本武道館といった前回の施設は改修を経て生まれ変わる。注目されるのは臨海部に集中する新設競技場だ。埋立地のポテンシャルを最大限に引き出し、広大な公園を擁した「海の森水上競技

場」を建設する。閉会後も国内外の大会やイベントに活用される。晴海を中心に西側にヘリテッジゾーン、南の臨海部に東京ベイゾーン。それぞれのエリアには五〇年後、いや一〇〇年後にも「二〇二〇年」の記憶を留めるランドマークが残されているかもしれない。

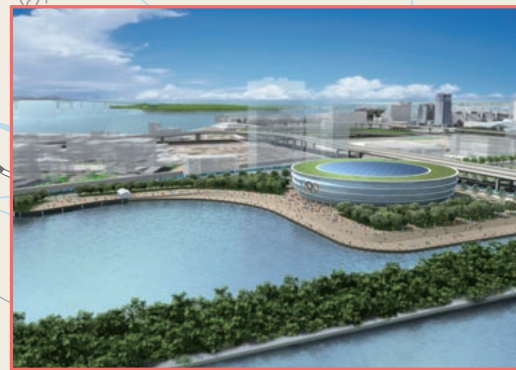
競技場及び関連施設

- 新設
- 既設(改良含む)
- 仮設

0 5km



選手村 (イメージ)



有明アリーナ (イメージ)



東京ビッグサイト:メインメディアセンター (イメージ)

オリンピックアクアティクスセンター (イメージ)



成田国際空港

東京国際空港
(羽田空港)

成熟都市で行う
世界安全なオリンピック

感動を生んだ 競技場 1964

「代々木選手村」
世界中から集まった
主役たちを支える

選手村は米軍将校の住宅を
改修して運用した。敷地内
は「男子村」と「女子村」に
区分けされ、女子村は男子
禁制だった。

アスリートたちの 日常を支えた選手村

流行の発信源、原宿。その西側に広がる代々木公園は、前回の東京オリンピックの選手村の跡地に造成された都市森林公園である。

かつて日本陸軍の練兵場であった「代々木の原」が公園として再生が計画されたのは昭和二十年、戦災復興計画が動き出したときだった。その後、敷地は米軍に接収され、軍の居留施設「ワシントンハイツ」となる。選手村はこの米軍将校が使用していた宿舍二四九棟五四三戸の木造住宅と、鉄筋四階建てのアパ



食堂には都内の一流ホテルから調理師が派遣され、アスリートたちの旺盛な食欲に応える。日本の食文化レベルの高さをアピールした。

ート一四棟をそのまま活用して整備された。もとより欧米人規格で設計された住戸である。世界中から集うアスリートたちの快適な滞在を果たすのに十分な居住性を有していた。村内は男女別に区割りされ、大会期間中は九四カ国の選手、役員延べ一五万人が利用した。

また、宿舍とは別に高床式平屋建ての大食堂二棟が新設された。ここにはホテルオークラや帝国ホテルの調理師が派遣され、腕を振るった。富士食堂、桜食堂と命名された食堂の収容人員はそれぞれ一、〇〇〇名。大人数に対応するため食事は三交代制とされた。外国選手の食欲の旺盛さも話題になり、このままでは給食計画が破綻すると担当者をやきもきさせた。一日あたり一万五、〇〇〇本の清涼飲料が消費され、一度に九、〇〇〇枚のステーキを焼いたという逸話も残されている。

現在に残る一九六四年の記憶

選手村は閉会後に撤去され、現在はオランダ選手団が利用した一棟が記念として残るのみだが、そ

の足跡は随所に見ることができ。JR原宿駅にほど近い「五輪橋」もそのひとつだ。山手線を跨ぐ橋が参宮橋に限られていたため、メイン会場の神宮外苑と選手村を直結するルートとして新たに架設された。当初は何の変哲もない跨線橋だったが、一九九〇年代の景観整備によってメモリアルアーチに再生。現在の五輪橋の親柱に地球儀、手すりの壁面には柔道、マラソン、体操のレリーフがほどこされ、この地が当時、拠点のひとつであったことを伝えている。

五輪橋を経て公園を南北に分断するロンドン通りは、送迎バスの巡回路だった。この他にも、ヘルシンキ通り、メルボルン通りと開催都市の名を冠した散策路がある。さらに、今でも現役の競技施設、国立代々木競技場は丹下健三氏の設計によるもの。アートとも言える建造物は、日本の建設技術の高さを世界に印象づけた。かつての選手村は、今や都民の憩いの場として生まれ変わったが、公園内の随所にこうした数々のオリンピック遺産が残されている。



選手村の宿舍はオランダ選手団が使用した一棟が記念として残されている。パーゴラ風の玄関屋根が当時の空気感を今に伝える。

メイン会場となった神宮外苑エリアと選手村をつなぐ「五輪橋」。景観整備の際に親柱の地球儀や競技のレリーフが施され、記念碑的な橋梁として再生した。

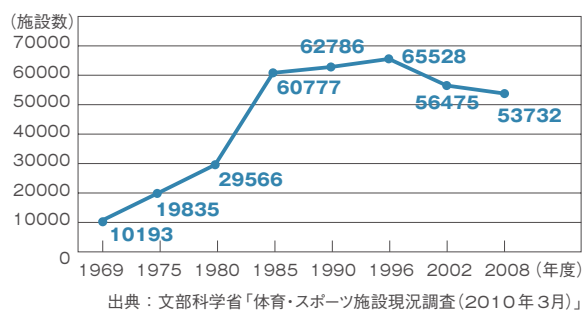


TOKYO 64-20 INNOVATION

開会式で復興した日本を世界に印象つけた聖火台は、319名の東京五輪金メダリストの氏名が刻まれた正面玄関の銘板とともに新国立競技場での保存が検討されている。



●公共スポーツ施設数の推移



今年5月に建替えのため閉鎖された国立競技場。5カ月間にわたって記念イベント「SAYONARA国立競技場プロジェクト」が開催され、多くの市民が「スポーツの聖地」に思いを馳せた。



感動を生んだ 競技場 1964~2014

い。管理運営にあたる(独)日本スポーツ振興センターの古泉修課長はこう語る。「場内には当時からプールがあり、オリンピック閉会後は水泳教室が開かれるなど将来のスポーツ振興を見据えた競技場だったのだと思います」。その後、ラグビーやテニスなど各種スポーツ教室が人気を呼び、国民とスポーツの橋渡し役を担ってきた。「ラグビーにマラソン、そしてサッカーとスポーツにも時代毎のブームがあります。その種目毎に選手、観戦者の利便性を考慮して細部の改修、維持を継続してきました」。そして近年では屋外コンサート会場として、アーティストたちが目指す檜舞台となった。「国立競技場は数々の記録と記憶を刻んできました。平成三年の世界陸上ではカール・ルイスが一〇〇メートルの世界新を出しました。走り幅跳びのマイク・パウエルが八メートル五センチは未だに破られていない。音楽イベントでもアイドルが施設の景観に感動していた様子を覚えています。国立競技場は数々の記録と記憶を刻んできたんです」と古泉課長

歴史的な名勝負の舞台 スポーツの「聖地」

国立競技場（国立霞ヶ丘陸上競技場）は、一九五八年に開催された第三回アジア競技大会の主会場として建設された。しかし、その時すでに「東京オリンピック開催」という悲願が射程距離にあった。完成の翌年、一九六四年の東京オリンピック開催が決まる。国立競技場はオリンピック招致の最大、最強のファクターとなった。一九六二年から翌年にかけてパッ

「国立競技場（国立霞ヶ丘陸上競技場）」 いつの時代も 聖地で ありつづけた

クスタンドの増設、グラウンド改修など拡充工事が行われる。世界初となった競技場内の地下道も建設された。そして、一九六四年十月十日、前日の大雨が嘘のような晴天のもと、この地で東京オリンピックの開会式が挙行され、二週間にわたり熱戦の舞台として数々のドラマを生み出した。

トップアスリートへも 市民へも隔てなく開放

国立競技場建設の背景にあったのは東京オリンピックだけではな

は話す。そのスポーツの聖地も二〇二〇年に向けて建替えが決定、今年五月に半世紀余りの歴史に幕を下ろした。

聖火が消えた日 新たな「聖地」へ

国立競技場の周辺を歩いてみる。霞ヶ丘周辺には高いポイントがなく、競技場の全景を一望することは難しい。旺盛な緑に囲まれ、隣接するJR千駄ヶ谷駅やすぐ横を走る総武線の車窓からも競技場を目にすることはできない。大都会の真ん中にこれほど巨大な構造物がある。ことさらその勇姿を誇示するわけでもなく、都市の一部として厳然とそこにあった。今年最後の蝉時雨が歓声に変換されてアタマの中で鳴り響いた。六年後、新競技場に溢れる歓声の大きさは想像をはるかに超えることだろう。



日本スポーツ振興センター
国立競技場事業課 課長
古泉 修



東京都 オリンピック・パラリンピック準備局
スポーツ推進部
スポーツ施設担当課長
清水俊二郎

開してきた。そのひとつが今回の長期ビジョンにもある「四大スポーツクラスタープロジェクト」だ。神宮(①)、駒沢(②)、臨海(③)、武蔵野の森(④)の四地区に大規模競技施設を集約し、スポーツによる都市の活性化を実現しようとする計画である。

クラスターのひとつ武蔵野の森地区では大規模屋内競技施設となる「武蔵野の森総合スポーツ施設」の整備が動き始めている。主体となるのは同地区における大型アリーナの建設。国際大会の開催も可能とする新競技場は、既存の「味の素スタジアム」など周辺のスポーツ施設と連携して多摩地区のスポーツ振興を促すとともに、同地区の活性化、まちづくりに貢献する。完成は二年後の予定。二〇二〇年東京オリンピックの新たなステージとして注目を集めている。



都内4カ所にスポーツ施設を集約して賑わいのあるエリアを創出。スポーツ振興施策が活力に溢れた都市の形成を牽引する。

レガシーを継承し 愛される施設をつくる

新しいクラスターの整備だけではなく、既存のオリンピックレガシー(遺産)の継承、有効活用も視野に入れる必要があると示唆するのは、東京都オリンピック・パラリンピック準備局の清水俊二郎課長だ。「たとえば『駒沢オリンピック公園』は、長期にわたって都民に親しまれているオリンピック

レガシーです。一九六四年のシンボルが時を経て深く都民の日常に根付き、大規模な大会から、日々のジョギングまで幅広く対応するスポーツ拠点として定着しました。しかし、その老朽化は否めず、改修が大きな課題となっている。駒沢オリンピック公園の陸上競技場は二〇二〇年東京オリンピックの練習会場として活用される計画だ。今後、国際的な競技団体の要望などを聴取しながら改善点

を精査していくという。

清水課長は「オリンピック・パラリンピックという超大型の国際大会を『契機』として『駒沢』が新たな魅力を創出するかもしれない。それを未来に引き継いでいく、これもオリンピックレガシーの使命です」と話す。二〇二〇年東京オリンピックの成功を到達点として施設の整備が進む。そして閉会后、様々な施策は未来に向けた成長過程の出発点に立つ。

感動を生んだ 競技場 2020

「東京都四大スポーツクラスタープロジェクト」 スポート都市 東京に向けて

四大クラスターによる スポーツ都市東京の構築

先月、東京都は都政運営の新たな指針となる「東京都長期ビジョン(仮称)」の中間報告を発表した。二〇二〇年のオリンピック・パラリンピックの成功と、国際都市としての

の持続的な成長を見据えた様々な道筋が示されている。そのなかに「世界に存在感を示すトップアスリートの育成とスポーツ都市東京の実現」という政策指針がある。都は以前より、誰もがスポーツを楽しめる「スポーツ都市東京」の構築を目指し、様々な取組みを展

●誰もがスポーツに親しむことができる環境の整備

スポーツに親しむ場や機会の拡大

地域

- 地域スポーツクラブを全区市町村で展開
- 全ての地域スポーツクラブで子育て世代支援事業を実施
- 全区市町村で障害者スポーツ事業を実施
- 公立スポーツ施設の新築・改築を促進

いつでもどこでも
スポーツができる
環境を整備

↓
東京全体が
スポーツ
フィールドになる

職場やオフィス街

- 新たに企業の取組を支援し、働き盛り世代をターゲットにスポーツ機会を創出

大会競技施設等

- 様々なスポーツ大会・イベント等の開催
- 住民の施設利用を促進

公共空間(公園や川沿い)

- 仕事帰りや日常生活の中で、気軽にスポーツを楽しめる環境を一層整備
- 河川沿いにウォーキング等にも利用しやすい通路を新たに整備

世界トップレベルのスポーツ実施率70%を達成